

途上

谷崎潤一郎

青空文庫

東京T・M株式会社員法学士湯河勝太郎が、十二月も押し詰まった或る日の夕暮の五時頃に、金杉橋の電車通りを新橋の方へぶらぶら散歩している時であった。

「もし、もし、失礼ですがあなたは湯河さんじゃございませんか」

ちやうど彼が橋を半分以上渡つた時分に、こう云つて後ろから声をかけた者があつた。

湯河は振り返つた、——すると其処に、彼には嘗て面識のない、しかし風采の立派な一人の紳士が慇懃に山高帽を取つて礼をしながら、彼の前へ進んで来たのである。

「そうです、私は湯河ですが、………」

湯河はちよつと、その持ち前の好人物らしい狼狽え方で小さな眼をパチパチやらせた。

そうしてさながら彼の会社の重役に対する時のごとくおどおどした態度で云つた。なぜなら、その紳士は全く会社の重役に似た堂々たる人柄だったので、彼は一と目見た瞬間に、

「往來で物を云いかける無礼な奴」と云う感情を忽ち何処へか引込めてしまつて、我知らず月給取りの根性をサラケ出したのである。紳士は獵虎の襟の付いた、西班牙犬の毛のように房々した黒い玉羅紗の外套を纏つて、（外套の下には大方モーニングを着ているのだらうと推定される）縞のズボンを着いて、象牙のノツプのあるステッキを衝いた、色

の白い、四十かっこう恰好の太った男だった。

「いや、突然こんな所でお呼び止めして失礼だとは存じましたが、わたくしは実はこう云う者で、あなたの友人の渡辺法学士——あの方の紹介状を載いて、たった今会社の方へお尋ねしたところでした」

紳士はこう云って二枚の名刺を渡した。湯河はそれを受け取って街燈の明りの下へ出して見た。一枚の方はまぎ紛れもなく彼の親友渡辺の名刺である。名刺の上には渡辺の手でこんな文句がしたた認めてある、——「友人安藤一郎氏を御紹介する右は小生しょうせいの同県人にて小生とは年来親しくしている人なり君の会社に勤めつつある某社員の身元に就いて調べたい事項があるそうだから御面会の上宜敷よろしく御取計いを乞う」——もう一枚の名刺を見ると、「私立探偵安藤一郎 事務所 日本橋区かきがら蛸殻町三丁目四番地 電話浪花五〇一〇番」と記してある。

「ではあなたは、安藤さんとおっしゃるので、——」

湯河は其そこ処に立って、改めて紳士の様子をじろじろ眺めた。「私立探偵」——日本には珍しいこの職業が、東京にも五、六軒できたことは知っていたけれど、実際に会うのは今日が始めてである。それにしても日本の私立探偵は西洋のよりも風采が立派なようだ、

と、彼は思った。湯河は活動写真が好きだったので、西洋のそれにはたびたびフィルムでお目に懸っていたから。

「そうです、わたくしが安藤です。で、その名刺に書いてありますような要件に就いて、幸いあなたが会社の人事課の方に勤めておいでのことを伺ったものですから、それで只ただい今会社へお尋ねして御面会を願った訳なのです。いかがでしょう、御多忙のところを甚はなはだ恐縮ですが、少しお暇を割さいて下さる訳には参りますまいか」

紳士は、彼の職業にふさわしい、力のある、メタリックな声でテキパキと語った。

「なに、もう暇なんですから僕の方はいつでも差さしつか支えはありません、………」

と、湯河は探偵と聞いてから「わたくし」を「僕」に取り換えて話した。

「僕で分ることなら、御希望に従って何なりとお答えしましょう。しかしその御用件は非常にお急ぎのことでしょうか、もしお急ぎでなかったら明日では如何いかがでしょうか？ 今日でも差支えはない訳ですが、こうして往来で話をするのも変ですから、——」

「いや、御ごもつと尤もですが明日からは会社の方もお休みでしょうし、わざわざお宅へお伺いするほどの要件でもないのですから、御迷惑でも少しこの辺を散歩しながら話して戴きましよう。それにあなたは、いつもこうやって散歩なさるのがお好きじゃありませんか。は

はは」

と云つて、紳士は軽く笑つた。それは政治家気取りの男などがよく使う豪快な笑い方だつた。

湯河は明らかに困つた顔つきをした。と云うのは、彼のポケットには今しがた会社から貰つて来た月給と年末賞与とが忍ばせてあつた。その金は彼としては少なからぬ額だったので、彼は私かに今夜の自分自身を幸福に感じていた。これから銀座へでも行つて、この間からせびられていた妻の手套てぶくろと肩掛とを買つて、——あのハイカラな彼女の顔に似合うようなどっしりした毛皮の奴を買つて、——そして早く家へ歸つて彼女を喜ばせてやろう、——そんなことを思いながら歩いている矢先だったのである。彼はこの安藤と云う見ず知らずの人間のために、突然楽しい空想を破られたばかりでなく、今夜の折角つかくの幸福にひびを入れられたような気がした。それはいいとしても、人が散歩好きのこゝとを知つていて、会社から追つ駈けて来るなんて、何ほ探偵でも厭な奴だ、どうしてこの男は己の顔を知つていたんだらう、そう考えると不愉快だつた。おまけに彼は腹も減つていた。

「どうでしょう、お手間は取らせない積りですが少し付き合つて戴けますまいか。私の方

は、或る個人の身元に就いて立ち入ったことをお伺いしたいのですから、却つて会社で目に懸るよりも往來の方が都合がいいのです」

「そうですか、じやとにかく御一緒に其処まで行きましょう」

湯河は仕方なしに紳士と並んで又新橋の方へ歩き出した。紳士の云うところにも理窟はあるし、それに、明日になつて探偵の名刺を持つて家へ尋ねて来られるのも迷惑だと云うことに、気が付いたからである。

歩き出すとすぐに、紳士——探偵はポケットから葉巻を出して吸い始めた。が、ものの一町も行く間、彼はそうして葉巻を吸っているばかりだった。湯河が馬鹿にされたような氣持でイライラして来たことは云うまでもない。

「で、その御用件と云うのを伺いましょう。僕の方の社員の身元とおっしゃると誰のことでしょうか。僕で分ることなら何でもお答えする積りですが、——」

「無論あなたならお分りになるだろうと思います」

紳士はまた二、三分黙つて葉巻を吸つた。

「多分何でしょうな、その男が結婚するとも云うので身元をお調べになるのでしょうか」

「ええそうなんです、御推察の通りです」

「僕は人事課にいるので、よくそんなのがやって来ますよ。一体誰ですかその男は？」

湯河はせめてそのことに興味を感じようとするらしく好奇心を誘いながら云った。

「さあ、誰と云つて、———そうおつしやられるとちよつと申しにくい訳ですが、その人と云うのは実はあなたですよ。あなたの身元調べを頼まれているんですよ。こんなことは人から間接に聞くよりも、直接あなたに打^ぶつかった方が早いと思つたもんですから、それでお尋ねするのですがね」

「僕はしかし、———あなたは御存知ないかも知れませんが、もう結婚した男ですよ。何かお間違いないでしょうか」

「いや、間違いないやありません。あなたに奥様がおあんなさることは私も知っています。けれどもあなたは、まだ法律上結婚の手続きを済ましてはいらつしやらないでしょう。そうして近いうちに、できるなら一日も早く、その手続きを済ましたいと考えていらつしやることも事実でしょう」

「ああそうですか、分りました。するとあなたは僕の家内の実家の方から、身元調べを頼まれた訳なんですな」

「誰に頼まれたかと云うことは、私の職責上申し上げにくいのです。あなたにも大^{おお}凡^{よそ}お

心当りがおありでしょうから、どうかその点は見逃して戴きとうございます」

「ええよござんすとも、そんなことはちつとも構いません。僕自身のことなら何でも僕に聞いて下さい。間接に調べられるよりはそのの方が僕も気持がよござんすから。——僕はあなたが、そう云う方法を取って下さったことを感謝します」

「はは、感謝して戴いては痛み入りますな。——僕はいつでも（と、紳士も「僕」を使い出しながら）結婚の身元調べなんぞにはこの方法を取っているんです。相手が相当の人格のあり地位のある場合には、実際直接に打ぶつかった方が間違いないんです。それにどうしても本人に聞かなければならない問題もありますからな」

「そうですよ、そうですとも！」

と、湯河は嬉うれしそうに賛成した。彼はいつの間にか機嫌を直していたのである。

「のみならず、僕はあなたの結婚問題には少なからず同情を寄せております」

紳士は、湯河の嬉うれしそうな顔をチラと見て、笑いながら言葉を続けた。

「あなたの方へ奥様の籍をお入れなさるのには、奥様と奥様の御実家とが一日も早く和解なさらなければいけませんな。でなければ奥様が二十五歳におなりになるまで、もう三、四年待たなければなりません。しかし、和解なさるには奥様よりも実はあなたを先方へ理

解させることが必要なのです。それが何よりも肝心なのです。で、僕もできるだけ御尽力はしますが、あなたもまあそのためと思つて、僕の質問に腹藏なく答えて戴きましょう」

「ええ、そりやよく分つています。ですから何卒御遠慮なく、——」

「そこでと、——あなたは渡辺君と同期に御在学だったそうですから、大学をお出になったのはたしか大正二年になりますな？——先ずこのことからお尋ねしましょう」

「そうです、大正二年の卒業です。そうして卒業するとすぐに今のT・M会社へ這入ったのです」

「さよう、卒業なさるとすぐ、今のT・M会社へお這入りになった。——それは承知してはいますが、あなたがあの先の奥様と御結婚なすつたのは、あれはいつでしたかな。あれは何でも、会社へお這入りになると同時だったように思いますが——」

「ええそうですよ、会社へ這入つたのが九月でしてね、明くる月の十月に結婚しました」

「大正二年の十月と、——（そう云いながら紳士は右の手を指折り数えて、）するとちようど満五年半ばかり御同棲なすつた訳ですね。先の奥様がチブスでお亡くなりになったのは、大正八年の四月だった筈ですから」

「ええ」

と云つたが、湯河は不思議な気がした。「この男は己おれを間接には調べないと云つておきながら、いろいろのことを調べている」——で、彼は再び不愉快な顔つきになった。

「あなたは先の奥さんを大そう愛していらしたそうですね」

「ええ愛していました。——しかし、それだからと云つて今度の妻を同じ程度に愛しないと云う訳じやありません。亡くなった当座は勿論もちろん未練もありましたけれど、その未練は幸いにして癒いやしがたいものではなかつたのです。今度の妻がそれを癒やしてくれたのです。だから僕はその点から云つても、ぜひとも久満くまこ子と、——久満子と云うのは今の妻の名前です。お断りするまでもなくあなたは疾とうに御承知のことと思ひますが、——正式に結婚しなければならぬ義務を感じております」

「イヤ御ごもつと尤もで」

と、紳士は彼の熱心な口調を軽く受け流しながら、

「僕は先の奥さんのお名前も知っております、筆子さんとおっしゃるのでしよう。——

それからまた、筆子さんが大變病身なお方で、チブスでお亡くなりになる前にも、たびたびお患わづらいなすつたことを承知しております」

「驚きましたな、どうも。さすが御職掌柄で何もかも御存知ですな。そんなに知ってい

つしやるならもうお調べになるところはなさそうですね」

「あはははは、そうおつしやられると恐縮です。何分これで飯を食っているんですから、まあそんなにイジメないで下さい。——で、あの筆子さんの御病身のことにつに就いてですが、あの方はチブスをおやりになる前に一度パラチブスをおやりになりましたね、……：……：……こうツと、それはたしか大正六年の秋、十月頃でした。かなり重いパラチブスで、なかなか熱が下らなかつたので、あなたが非常に御心配なすつたと云うことを聞いております。それからその明くる年、大正七年になって、正月に風かぜを引いて五、六日寝ていらしたことがあつたでしょう」

「ああそうですね、そんなこともありましたつけ」

「その次には又、七月に一度と、八月に二度と、夏のうちは誰にでもありがちな腹下しをなさいましたな。この三度の腹下しのうちで、二度は極ごくく軽微なものでしたからお休みになるほどではなかつたようですが、一度は少し重くつて一日二日伏せていらした。すると、今度は秋になって例の流行性感冒がはやり出して来て、筆子さんはそれに二度もおか罹りかになつた。即ち十月すなわに一いっ遍べん軽いのをやって、二度目は明くる年の大正八年の正月のことでしたらう。その時は肺炎を併発して危篤な御容態だったと聞いております。その肺

炎がやつとのことで全快すると、二た月も立たないうちにチブスでお亡くなりになったのです。——そうでしょうな？ 僕の云うことに多分間違いはありますまいな？」

「ええ」

と云ったきり湯河は下を向いて何かしら考え始めた、——二人はもう新橋を渡つて歳さい晩ばんの銀座通りを歩いていたのである。

「全く先の奥さんはお気の毒でした。亡くなられる前後半年ばかりと云うものは、死ぬよ
うな大患いを二度もなすつたばかりでなく、その間に又胆きもを冷やすよな危険な目にもチ
ヨイチヨイお会いでしたからな。——あの、窒息事件があつたのはいつ頃でしたらうか
？」

そう云つても湯河が黙つているので、紳士は独りで領うなずきながらしやべり続けた。

「あれはこうツと、奥さんの肺炎がすっかりよくなって、二、三日うちに床とこ上げをなさろ
うと云う時分、——病室の瓦斯ガスストーブから間違いが起こつたのだから何でも寒い時分
ですな、二月の末のことでしたらうかな、瓦斯の栓ゆるが弛ゆるんでいたので、夜中に奥さんがも
う少して窒息なさろうとしたのは。しかし好い塩あん梅ばいに大事に至らなかつたものの、あの
ために奥さんの床上げが二、三日延びたことは事実ですな。——そうです、そうです、

それからまだこんなこともあつたじやありませんか、奥さんが乗合自動車で新橋から須田町へおいでになる途中で、その自動車が電車と衝突して、すんでのことで……」

「ちよつと、ちよつとお待ち下さい。僕はさつきからあなたの探偵眼には少なからず敬服していますが、一体何の必要があつて、いかなる方法でそんなことをお調べになつたのでしょうか」

「いや、別に必要があつた訳じやないんですがね、僕はどうも探偵癖があり過ぎるもんだから、つい余計なことまで調べ上げて人を驚かしてみたくなるんですよ。自分でも悪い癖だと思つていますが、なかなか止められないんです。今じきに本題へ這入りますから、まあもう少し辛抱して聞いて下さい。——で、あの時奥さんは、自動車の窓が壊れたので、ガラスの破片で額へ怪我をなさいましたね」

「そうです。しかし筆子は割りに呑気な女でしたから、そんなにビックリしてもいませんでしたよ。それに、怪我と云つてもほんの擦り傷でしたから」

「ですが、あの衝突事件に就いては、僕が思うのにあなたも多少責任がある訳です」

「なぜ？」

「なぜと云つて、奥さんが乗合自動車へお乗りになつたのは、あなたが電車へ乗るな、乗

合自動車で行けとお云いつけになったからでしょう」

「そりや云いつけました—— かも知れませんが。僕はそんな細々こまごましたことまでハッキリ覚えてはいませんが、なるほどそう云いつけたようにも思います。そう、そう、たしかにそう云ったでしょう。それはこう云う訳だったんです、何しろ筆子は二度も流行性感冒をやった後でしたらう、そうしてその時分、人ごみの電車に乗るのは最も感冒やすに感染し易いと云うことが、新聞なぞに出ている時分でしたらう、だから僕の考えでは、電車より乗合自動車の方が危険が少ないと思つたんです。それで決して電車へは乗るなど、固く云いつけた訳なんです、まさか筆子の乗つた自動車が、運悪く衝突しようとは思いませんからね。僕に責任なんかある筈はずはありませんよ。筆子だつてそんなことは思いもしなかつたし、僕の忠告を感謝しているくらいでした」

「勿論もちろん筆子さんは常にあなたの親切を感謝しておいででした、亡くなられる最後まで感謝しておいででした。けれども僕は、あの自動車事件だけはあなたに責任があると思ひますね。そりやあなたは奥さんの御病気のために考えを考えてそうしろとおっしゃつたでしょう。それはきつとそうに違いありません。にも拘かからず、僕はやはりあなたに責任があると思ひますね」

「なぜ？」

「お分りにならないければ説明しましょう、——あなたは今、まさかあの自動車が衝突しようとは思わなかったとおっしゃったようです。しかし奥様が自動車へお乗りになったのはあの日一日だけではありませんな。あの時分、奥さんは大おおわづら患まんせいいをなすつた後で、まだ医者に見て貰もらう必要があつて、一日おきに芝しばぐち口のお宅から万世橋まんせいばしの病院まで通つていらした。それも一と月くらい通わなければならぬことは最初から分つていた。そうしてその間はいつも乗合自動車へお乗りになった。衝突事故があつたのはつまりその期間の出来事です。よござんすかね。ところでもう一つ注意すべきことは、あの時分はちやうど乗合自動車が始まり立てで、衝突事故がしばしばあつたのです。衝突しやしないかと云う心配は、少し神経質の人にはかなりあつたのです。——ちよつとお断り申しておきませんが、あなたは神経質の人です、——そのあなたがあなたの最愛の奥さんを、あれほどたびたびあの自動車へお乗せになると云うことは少なくとも、あなたに似合わない不注意じゃないでしょうか。一日おきに一と月の間あれで往復するとなれば、その人は三十回衝突の危険に曝さらされることになりました」

「あははははは、其処そこへ気が付かれるとはあなたも僕に劣らない神経質ですな。なるほど、

そうおつしやられると、僕はあの時分のことをだんだん思い出して来ましたが、僕もあの時満更まんぎらそれに気が付かなくなかつたのです。けれども僕はこう考えたのです。自動車における衝突の危険と、電車における感冒伝染の危険と、執方どつちがプロバビリティーが多いか。それから又、仮りに危険のプロバビリティーが両方同じだとして、執方が余計生命に危険であるか。この問題を考えてみて、結局乗合自動車の方がより安全だと思つたのです。なぜかと云うと、今あなたのおつしやつた通り月に三十回往復するとして、もし電車に乗ればその三十台の電車の孰れいずにも、必ず感冒の黴菌ばいきんがいますと思わなければなりません。あの時分は流行の絶頂期でしたからそうみるのが至当だつたのです。既に黴菌がいますとなれば、其処で感染するのは偶然ではありません。然るしかに自動車の事故の方はこれは全く偶然の禍わざわいです。無論どの自動車にも衝突のポシビリティーはありますが、しかし始めから禍か因いんが歴然と存在している場合とは違いますからな。次にはこういうことも私には云われま

す。筆子は二度も流行性感冒に罹かかっています、これは彼女が普通の人よりもそれに罹り易やすい體質を持つている証拠です。だから電車へ乗れば、彼女は多勢の乗客の内でも危険を受けるべく扱えらばれた一人とならなければなりません。自動車の場合には乗客の感ずる危険は平等です。のみならず僕は危険の程度に就ついてもこう考えました、彼女がもし、三度目に

流行性感冒に罹つたとしたら、必ず又肺炎を起すに違いないし、そうなると今度こそ助からないだろう。一度肺炎をやつたものは再び肺炎に罹り易いと云うことを聞いてもいましたし、おまけに彼女は病後の衰弱から十分恢かい復ふくしきらずにいた時ですから、僕のこの心配は杞憂きゆうではなかつたのです。ところが衝突の方は、衝突したから死ぬと極きまつてやしませんからな。よくよく不運な場合でなけりや大怪我をすると云うこともないし、大怪我もとで命を取られるようなことはめつたにありやしませんからな。そうして僕のこの考えはやはり間違つてはいなかつたのです。御覽なさい、筆子は往復三十回の中に一度衝突に会いましたけれど、僅わずかに擦かすり傷きずだけで済んだじゃありませんか」

「なるほど、あなたのおっしゃることは唯ただそれだけ伺つていれば理窟りくつが通つています。何ど処こにも切り込む隙すきがないように聞えます。が、あなたが只ただいま今おっしゃらなかつた部分のうち、実は見逃してはならないことがあるのです。と云うのは、今のその電車と自動車との危険の可能性の問題ですな、自動車の方が電車よりも危険の率が少ない、また危険があつてもその程度が軽い、そうして乗客が平等にその危険性を負担する、これがあなたの御意見だつたようですが、少なくともあなたの奥様の場合には、自動車に乗つても電車と同じく危険に対して扱えらばれた一人であつたと、僕は思うのです。決して外ほかの乗客と平等に

危険に曝さらされてはいなかった筈はずです。つまり、自動車が衝突した場合に、あなたの奥様は誰よりも先に、かつ恐らくは誰よりも重い負傷を受けるべき運命の下に置かれていらした。このことをあなたは見逃してはなりません」

「どうしてそう云うことになるでしょう？ 僕には分りかねますがね」

「ははあ、お分りにならない？ どうも不思議ですな。——しかしあなたは、あの時分筆子さんにこう云うことをおっしゃいましたな、乗合自動車へ乗る時はいつもなるべく一番前の方へ乗れ、それが最も安全な方法だと——」

「そうです、その安全と云う意味はこうだったのです、——」

「いや、お待ちなさい、あなたの安全と云う意味はこうだったでしょう、——自動車の中にだつてやはりいくらか感冒の黴ばい菌きんがいる。で、それを吸わないようにするには、なるべく風かざ上かみの方にいるがいいと云う理窟りくつでしょう。すると乗合自動車だつて、電車ほど人がこんでいないにしても、感冒伝染の危険が絶無ではない訳ですな。あなたはさつきこの事実を忘れておいでのようでしたな。それからあなたは今の理窟りくつに付け加えて、乗合自動車は前の方へ乗る方が震動が少ない、奥さんはまだ病後の疲労が脱ぬけきらないのだから、なるべく体を震動させない方がいい。——この二つの理由をもって、あなたは奥さんに

前へ乗ることをお勧めなすつたのです。勧めたと云うよりは寧ろ厳しくお云いつけになったのです。奥さんはあんな正直な方で、あなたの親切を無にしては悪いと考えていらしたから、できるだけ命令通りになさろうと心がけておいででした。そこで、あなたのお言葉は着々と実行されていきました」

「……………」

「よござんすかね、あなたは乗合自動車の場合における感冒伝染の危険と云うものを、最初は勘定に入れていらつしやらなかつた。いらつしやらなかつたにも拘らず、それを口実にして前の方へお乗せになった、——ここに一つの矛盾があります。そうしてもう一つの矛盾は、最初勘定に入れておいた衝突の危険の方は、その時になって全く閑却されてしまったことです。乗合自動車が一番前の方へ乗る、——衝突の場合を考えたら、このくらい危険なことはないでしょう、其処そこに席を占めた人は、その危険に対して結局扱えらばれた一人になる訳です。だから御覧なさい、あの時怪我をしたのは奥様だけだったじゃありませんか、あんな、ほんのちよつとした衝突でも、外ほかのお客は無事だったのに奥様だけは擦かすり傷をなすつた。あれがもつとひどい衝突だったら、外のお客が擦り傷をして奥様だけが重傷を負います。更にひどかつた場合には、外のお客が重傷を負って奥様だけが命を取ら

れます。——衝突と云うことは、おっしやるまでもなく偶然に違いありません。しかしその偶然が起つた場合に、怪我をすると云うことは、奥様の場合には偶然でなく必然です」

二人は京橋を渡つた、が、紳士も湯河も、自分たちが今何処どこを歩いているかをまるで忘れてしまったかのように、一人は熱心に語りつつ一人は黙って耳を傾けつつ真直ぐに歩いて行つた。——

「ですからあなたは、或る一定の偶然の危険の中へ奥様を置き、そうしてその偶然の範囲内での必然の危険の中へ、更に奥様を追い込んだと云う結果になります。これは単純な偶然の危険とは意味が違います。そうなると果して電車より安全かどうか分らなくなります。第一、あの時分の奥様は二度目の流行性感冒から直つたばかりの時だったので。従つてその病気に対する免疫性を持つておられたと考えるのが至当ではないでしょうか。僕に云わせれば、あの時の奥様には絶対に伝染の危険はなかつたのでした。扱ばれた一人であっても、それは安全な方へ扱ばれていたのでした。一度肺炎に罹かかつたものがもう一度罹り易やすいと云うことは、或る期間をおいての話です」

「しかしですね、その免疫性と云うことも僕は知らないじゃなかつたんですが、何しろ十月に一度罹つて又正月にやつたんでしよう。すると免疫性もあまりアテにならないと思つ

たもんですから、……………」

「十月と正月との間には二た月の期間があります。ところがあの時の奥様はまだ完全に直り切らないで咳^{せき}をしていらしたのです。人から移されるよりは人に移す方の側だったのです」

「それからですね、今お話の衝突の危険と云うこともですね、既に衝突その物が非常に偶然な場合なんですから、その範囲内での必然と云つてみたところが、極^{ごく}く極^{まれ}く稀なことじやないでしょうか。偶然の中の必然と単純な必然とはやはり意味が違いますよ。沉^いんやその必然なるものが、必然怪我をすると云うだけのことで、必然命を取られると云うことにはならないのですからね」

「けれども偶然ひどい衝突があつた場合には必然命を取られると云うことは云えましような」

「ええ云えるでしょう、ですがそんな論理的遊戯をやつたつてつまらないじゃありませんか」

「あははは、論理的遊戯ですか、僕はこれが好きだもんですから、ウツカリ図に乗つて深入りをし過ぎたんです、イヤ失礼しました。もうじき本題に這^{はい}入りますよ。——で、這

入る前に、今の論理的遊戯の方を片付けてしましましょう。あなただって、僕をお笑いなさるけれど実はなかなか論理がお好きのようでもあるし、この方面では或は僕の先輩かも知れないくらいだから、満更興味の無いことではなからうと思うんです。そこで、今の偶然と必然の研究ですな、あれを或る一個の人間の心理と結び付ける時に、ここに新たな問題が生じる、論理が最早や単純な論理でなくなつて来ると云うことに、あなたはお氣付きにならないでしょうか」

「さあ、大分むずかしくなつて来ましたな」

「なにむずかしくも何ともありません。或る人間の心理と云つたのはつまり犯罪心理を云うのです。或る人が或る人を間接な方法で誰にも知らせずに殺そうとする。——殺すと云う言葉が穩当でないなら、死に至らしめようとしている。そうしてそのために、その人をなるべく多くの危険へ露出させる。その場合に、その人は自分の意図を悟らせないためにも、又相手の人を其処へ知らず識らず導くためにも、偶然の危険を拵ぶよりほか仕方がありません。しかしその偶然の中に、ちよいとは目に付かない或る必然が含まれているとすれば、なおさらお誂え向きだと云う訳です。で、あなたが奥さんを乗合自動車へお乗せになつたことは、たまたまその場合と外形において一致してはいないでしょうか？ 僕は

『外形において』と云います、どうか感情を害しないで下さい。無論あなたにそんな意図があつたとは云いませんが、あなたにしてもそう云う人間の心理はお分りになるでしょうな」

「あなたは御職掌柄妙なことをお考えになりますね。外形において一致しているかどうか、あなたの御判断にお任せするより仕方がありませんが、しかしたった一と月の間、三十回自動車で往復させただけで、その間に人の命が奪えると思つている人間があつたら、それは馬鹿か氣違いでしょう。そんな頼たよりにならない偶然を頼りにする奴やつもないでしょう」

「そうです、たった三十回自動車へ乗せただけなら、その偶然が命中する機会は少ないと云えます。けれどもいろいろな方面からいろいろな危険を捜さがし出して来て、その人の上へ偶然を幾つも幾つも積み重ねる、——そうするとつまり、命中率が幾層倍にも殖ふえて来る訳です。無数の偶然的危険が寄り集つて一個の焦点を作つている中へ、その人を引き入れるようにする。そうなつた場合には、もうその人の蒙こうむる危険は偶然でなく、必然になつて来るのです」

「——とおっしゃると、たとえばどう云う風ふうにするのでしょうか？」

「たとえばですね、ここに一人の男があつてその妻を殺そう、——死に至らしめようと

考えている。然るにその妻は生れつき心臓が弱い。——この心臓が弱いと云う事実の中には、既に偶然的危険の種子が含まれています。で、その危険を増大させるために、ますます心臓を悪くするような条件を彼女に与える。たとえばその男は妻に飲酒の習慣を付けさせようと思つて、酒を飲むことをすすめました。最初は葡萄酒を寝しなに一杯ずつ飲むことをすすめる、その一杯をだんだんに殖やして食後には必ず飲むようにさせる、こうして次第にアルコールの味を覚えさせました。しかし彼女はもともと酒を嗜む傾向のない女だったので、夫が望むほどの酒飲みにはなれませんでした。そこで夫は、第二の手段として煙草をすすめました。『女だつてそのくらいな楽しみがなけりや仕様がな』そう云つて、舶来のいい香いのする煙草を買つて来ては彼女に吸わせました。ところがこの計画は立派に成功して、一と月ほどのうちに、彼女はほんとうの喫煙家になつてしまつたのです。もう止そうと思つても止せなくなつてしまつたのです。次に夫は、心臓の弱い者には冷水浴が有害であることを聞き込んで来て、それを彼女にやらせました。『お前は風を引き易い體質だから、毎朝怠らず冷水浴をやるがいい』と、その男は親切らしく妻に云つたのです。心の底から夫を信頼している妻は直ちにその通り実行しました。そうして、それらのために自分の心臓がいよいよ悪くなるのを知らずにいました。ですがそれだけでは

夫の計画が十分に遂行されたとは云えません。彼女の心臓をそんなに悪くしておいてから、今度はその心臓に打撃を与えるのです。つまり、なるべく高い熱の続くような病氣、——チブスとか肺炎とかに罹り易いような状態へ、彼女を置くのですな。その男が最初に拵んだのはチブスでした。彼はその目的で、チブス菌のいなものを頻りに細君に喰べさせました。『亜米利加人は食事の時に生水を飲む、水をベスト・ドリンクだと云って賞美する』などと称して、細君に生水を飲ませる。刺身を喰わせる。それから、生の牡蠣と心太にはチブス菌が多いことを知って、それを喰わせる。勿論細君にすすめるためには夫自身もそうしなければなりませんでしたが、夫は以前にチブスをやったことがあるので、免疫性になっていたんです。夫のこの計画は、彼の希望通りの結果を齎しはしませんでした、殆ど七分通りは成功しかかったのです。と云うのは、細君はチブスにはなりませんでしたが、パラチブスにかかりました。そうして一週間も高い熱に苦しめられました。が、パラチブスの死亡は一割内外に過ぎませんから、幸か不幸か心臓の弱い細君は助かりました。夫はその七分通りの成功に勢いを得て、その後も相変らず生物を食べさせることを怠らずにいたので、細君は夏になるとしばしば下痢を起しました。夫はその度毎にハラハラしながら成り行きを見ていましたけれど、生憎にも彼の注文するチブ

スには容易に罹かからなかつたのです。するとやがて、夫のためには願つてもない機会が到来したのです。それは一昨年かの秋から翌年の冬へかけての悪性感冒の流行でした。夫はこの時期においてどうしても彼女を感冒に取り憑とかせようとたくらんだのです。十月早々、彼女は果してそれに罹かかりました、——なぜ罹かかつたかと云うと、彼女はその時分、咽喉のどを悪くしていたからです。夫は感冒予防の嗽うがいをしろと云つて、わざと度の強い過酸化水素水を拵こしらへて、それで始終彼女に嗽うがいをさせていました。そのために彼女は咽喉いんこうカタルを起していたのです。のみならず、ちょうどその時に親戚の伯母おばが感冒に罹かかつたので、夫は彼女を再三其処そこへ見舞いにやりました。彼女は五たび目に見舞いに行つて、歸つて来るとすぐぐに熱を出したのです。しかし、幸いにしてその時も助かりました。そうして正月になつて、今度は更に重いのに罹かかつてとうとう肺炎を起したのです。……」

こう云いながら、探偵はちよつと不思議なことをやつた、——持つていた葉巻の灰をトントンと叩たたき落すような風に見せて、彼は湯河の手頸てくびの辺を二、三度軽く小突いたのである、——何か無言の裡うちに注意をでも促すような工合ぐあいに。それから、あたかも二人は日本橋の橋手前まで来ていたのだが、探偵は村井銀行の先を右へ曲つて、中央郵便局の方角へ歩き出した。無論湯河も彼に喰くっついて行かなければならなかつた。

「この二度目の感冒にも、やはり夫の細工がありました」
と、探偵は続けた。

「その時分に、細君の実家の子供が激烈な感冒に罹って神田のS病院へ入院することになりました。すると夫は頼まれもしないのに細君をその子供の付添人にさせたのです。それはこう云う理窟りくつからでした、——『今度の風は移り易いからめったな者を付き添わせることはできない。私の家内はこの間感冒をやったばかりで免疫になっているから、付添人には最も適当だ』——そう云ったので、細君もなるほど思つて子供の看護をしているうちに、再び感冒を背負い込んだのです。そうして細君の肺炎はかなり重態でした。幾度も危険のことがありました。今度こそ夫の計略は十二分に効を奏しなかったのです。夫は彼女の枕許まくらもとで彼女が夫の不注意からこう云う大患になったことを詫言あやまりましたが、細君は夫を恨もうともせず、何処どこまでも生前の愛情を感謝しつつ静かに死んでいきそうにみえました。けれども、もう少しと云うところで今度も細君は助かってしまったのです。夫の心になつてみれば、九きゆう 仞じんの功を一簣いっきに虧かいた、——とでも云うべきでしょう。そこで、夫は又工夫を凝こらしました。これは病氣ばかりではいけない、病氣以外の災難にも遇あわせなければいけない、——そう考えたので、彼は先まず細君の病室にある瓦斯ガスストオブ

を利用しました。その時分細君は大分よくなっていたから、もう看護婦も付いてはいませんでしたが、まだ一週間ぐらいは夫と別の部屋に寝ている必要があったのです。で、夫は或る時偶然にこう云うことを発見しました。——細君は、夜眠りに就く時は火の用心を慮つて瓦斯ストオブを消して寝ること。瓦斯ストオブの栓は、病室から廊下へ出る際にあること。細君は夜中に一度便所へ行く習慣があり、そうしてその時には必ずその閾際を通ること。閾際を通る時に、細君は長い寝間着の裾をぞろぞろ引き擦つて歩くので、その裾が五度に三度までは必ず瓦斯の栓に触ること。もし瓦斯の栓がもう少し弱かったら、裾が触つた場合にそれが弛むに違いないこと。病室は日本間ではあつたけれども、建具がシツカリしていて隙間から風が洩らないようになっていゝこと。——偶然にも、其処にはそれだけの危険の種子が準備されていゝました。ここにおいて夫は、その偶然を必然に導くにはほんの僅かの手数を加えればいゝと云うことに気が付きました。それは即ち瓦斯の栓をもつと緩くしておくことです。彼は或る日、細君が昼寝をしている時にこつそりとその栓へ油を差して其処を滑かにしておきました。彼のこの行動は、極めて秘密の裡に行われた筈だったので、不幸にして彼は自分が知らない間にそれを見られていたのです。——見たのはその時分彼の家に使われていた女中でした。この女中は、細君が嫁に

来た時に細君の里から付いて来た者で、非常に細君思いの、氣転の利く女だったのです。

まあそんなことはどうでもよござんすがね、——」

探偵と湯河とは中央郵便局の前から兜橋を渡り、鎧橋を渡った。二人はいつの間にか水天宮前の電車通りを歩いていたのである。

「——で、今度も夫は七分通り成功して、残りの三分で失敗しました。細君は危く瓦斯のために窒息しかかったのですが、大事に至らないうちに眼を覚まして、夜中に大騒ぎになったのです。どうして瓦斯が洩れたのか、原因は間もなく分りましたけれど、それは細君自身の不注意と云うことになったのです。その次に夫が扱んだのは乗合自動車です。これはさつきもお話したように、細君が医者へ通うのを利用したので、彼はあらゆる機会を利用することを忘れませんでした。そこで自動車もまた不成功に終わった時に、更に新しい機会を掴みました。彼にその機会を与えた者は医者だったのです。医者は細君の病後保養のために転地することをすすめたのです。何処か空気のいい処へ一と月ほど行っているように、——そんな勧告があつたので、夫は細君にこう云いました、『お前は始終患つてばかりいるのだから、一と月や二た月転地するよりもいつそ家中でもっと空気のいい処へ引越すことにしよう。そうかと云つて、あまり遠くへ越す訳にもいかないから、大森

辺へ家を持つたらどうだろう。彼処あそこなら海も近いし、己おれが会社へ通うのにも都合がいいから』この意見に細君はすぐ賛成しました。あなたは御存知かどうか知りませんが、大森は大そう飲み水の悪い土地だそうですな、そうしてそのせいか伝染病が絶えないそうですな、殊ことにチブスが。——つまりその男は災難の方が駄目だめだったので再び病気を狙ねらい始めたのです。で、大森へ越してからは一層猛烈に生水や生物を細君に与えました。相変らず冷水浴を励行させ喫煙をすすめてもいきました。それから、彼は庭を手入れして樹木を沢山に植え込み、池を掘みずたまつて水溜こしらりを拵こしらえ、又便所の位置が悪いと云つてそれを西日の当るような方角に向き変えました。これは家の中に蚊はえと蠅はえとを発生させる手段だったのです。いやまだあります、彼の知人のうちにチブス患者ができる、彼は自分は免疫だからと称してしばしば其処そこへ見舞いに行き、たまには細君にも行かせました。こうして彼は気長に結果を待つている筈はずでしたが、この計略は思いのほか早く、越してからやっと一と月も立たないうちに、かつ今度こそ十分に効を奏したのです。彼が或ある友人のチブスを見舞いに行つてから間もなく、其処には又どんな陰險な手段ろうが弄ろうされたか知れませんが、細君はその病気に罹かかりました。そうして遂にそのために死んだのです。——どうですか、これはあなたの場合に、外形だけはそっくり当てはまりはしませんかね」

「ええ、———そ、そりや外形だけは———」

「あはははは、そうです、今までのところでは外形だけはです。あなたは先の奥^{せん}さんを愛していらした、ともかく外形だけは愛していらした。しかしそれと同時に、あなたはもう二、三年も前から先の奥様には内証で今の奥様を愛していらした。外形以上に愛していらした。すると、今までの事実がこの事実が加わって来ると、先の場合があなたに当てはまる程度は単に外形だけではなくって来ますな。———」

二人は水天宮の電車通りから右へ曲った狭い横町を歩いていった。横町の左側に「私立探偵」と書いた大きな看板を掲げた事務所風の家があった。ガラス戸の嵌^{はま}った二階にも階下にも明りが煌々^{こうこう}と燈^{とも}つていた。其処の前まで来ると、探偵は「あはははは」と大声で笑い出した。

「あはははは、もういけませんよ。もうお隠しなすつてもいけませんよ。あなたはさつきから顛^{ふる}えていらつしやるじやありませんか。先の奥様のお父様が今夜僕の家であなたを待っているんです。まあそんなに怯^{おび}えなくても大丈夫ですよ。ちよつと此^こ処へお這^{はい}入んなさい」

彼は突然湯河の手頸^{てくび}を掴^{つか}んでぐいと肩でドアを押しながら明るい家の中へ引^ひき擦^ずり込

んだ。電燈に照らされた湯河の顔は真青だった。彼は喪心したようにぐらぐらとよろめいて其処そこにある椅子いすの上に臀餅しりもちをついた。

青空文庫情報

底本：「文豪の探偵小説」集英社文庫、集英社

2006（平成18）年11月25日第1刷

底本の親本：「谷崎潤一郎 犯罪小説集」集英社文庫、集英社

1991（平成3）年8月

初出：「改造」

1920（大正9）年1月

入力：sogo

校正：まつもい

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

途上

谷崎潤一郎

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>